随想

サワリと念仏

長野　修

私達の年代になると朝記憶したことを晩にはもう忘れている。子供の時に時間をかけて覚えたことは終生忘れない。熊本のある財界人が「論語」「孟子」の章節を独持の節回しでそらんじるのをみて驚いた。聞いてみると、その人の祖父が時習館の最後の学生で、三つ四つの頃からその祖父に素読を教え込まれたとのこと。「ガクゥージダァイイーチ、シーノタマワーク…」とお経のように暗誦しながらその人は「私が時習館流の素読の最後の伝承者かもしれない」とつけ加えた。

私は八十八ヶ所の四国生まれ。二月の末ともなると、全国からお遍路が訪れた。「同行二人」などと書いた菅杖に金剛杖、手甲脚絆姿で野の道を歩いた。私たちは小学校からの帰るさ、お遍路さんに手を引かれ遠い紀州や肥後や備中の話を聞くのを楽しみにした。

亡き血縁の追善にと、沿道の家では軒先でお茶や豆、草餅などをお遍路さんに施した。〝お接待〟と云った。

善良で信心深かった私の両親は、宿に困ったお遍路さんを無料で家に泊めた。今でいう民宿だが、四国では善根宿（ゼンコンヤド）と言った。夜は主客同座で精進料理を食べ仏間でそろってご詠歌や念仏をあげた。母はよく「今夜はええ讃歎（サンダン）じゃった」と喜んだ。不心得な遍路の中には、家の品物や金を失敬、何食わぬ顔で翌朝出発してしまうのもいた。恩を仇で返すたぐいだが、母はほとんど腹を立てなかった。「よっぽど困っとったんよ、あの人は。これもまぁ人助けになるんじゃから……」と子供たちをたしなめた。

そんな中で覚えた和讃やチンブンカンプンの梵語の真言、長い長い観音経など今だに忘れない。終戦直後に農地を開放、復員した私は苦学生活をした。幸い寺に下宿、本堂の掃除の代償？に下宿代はタダ。金持檀家の葬式などにはにわか仕立ての客僧？　になってアルバイトした。お布施は本代になった。「芸は身を助けるだね、お母さん」と言うと、母はさびしそうな顔で「罰当たりなことを…。お仏飯のおめぐみよ」と戒めた。

聞き覚えといえば義太夫がある。四国は戦前、ジョウロリ、つまり義太夫が盛んで、ものもちの〝ダンナシ〟は競って義太夫を習った。両親とも義太夫が唯一の道楽だった。私も太桿の音を聞いて育ち、三つ四つの頃から回らぬ舌でサワリをそらんじた。

「そりゃ聞えませぬ伝兵衛さま」「添臥しはかなわずともお傍に居たいと辛抱して」「いろは書く子はあえなくとも…」ーサワリから始まって一段ものの義太夫までいつの間にかマスター？した。いまにして思えば、男女の愛情のかっとうをうたったツヤモノも多かった。謹厳そのものの両親だったが、幼い私が心中もののサワリを口ずさむ時もニコニコして聞いていた。

時にはすぐれたサワリの文句を解説してくれた。「柊」（ヒイラギ）に降る初雪の……」という熊谷陣屋の言葉を引いて母は、「何ちゃうきれいな言葉じゃろうか」と感にたえぬようにつぶやいた。

たしか小学五年の時、何の題か忘れたが綴方の中に「すまじきものは宮仕え」という寺小屋のサワリの一句を書いてしまった。ませた子だと思われたか先生は「なんでこんなこと知っとるんや」と聞かれた。顔を赤らめて「すみません」とあまると「怒っとるんと違うんやが…」と言われた。

今年は相次いで死んだ両親の七回忌。兄が「追善の浄瑠璃会を開き、村の人を招きたい」と言ってきた。その時は私も位牌の前で母が好きだった朝顔日記のサワリでもしみじみ語りたいものだ。

（毎日新聞熊本支局長）

酒蔵のなか

角田太一郎

酒造りは大変な重労働のように思われているかも知れないが、それは昔のことでいまでは中労働を通りこして、軽労働の部類に属しているといわれる。

おくればせながら、この世界にも機械化が行なわれた。おおまかにいって、この十年ほどの間に酒蔵の様相は、すっかり変わってしまった。

酒屋者（さかやもん）とか百日（ひゃくにち）とか言われる蔵人（くらびと）たちの睡眠不足と重筋肉労働によってつくられていた日本酒も、いまでは、その大部分を機械の力によって造ることができるようになった。

そのために蔵人は、もう蔵内で寝泊りする必要がなくなった。

それまでは、筑後や肥前、遠くは丹波や但馬の特定の農漁村から職工長にあたる杜氏（とうじ）に引卒されて、それらの特殊技能者の一団が酒蔵にやってきていた。小さな蔵では八、九名、大きな蔵では約二十名という人数だった。そして農漁閑期にあたる厳冬のほぼ百日間を蔵に寝泊まりして、酒造りに従事した。

長い間の共同生活と作業の性格から必要であったと思われるが、蔵人にはきびしい階級制があった。

杜氏を筆頭に頭、大師（または麹屋）酛屋、二番頭、釜屋、槽頭、上人、中人人、下人、飯屋（炊事係り）といった階級があり、その序列によってきびしい秩序が保たれていた。賃銀もまた、この階級によって格差がつけられていた。いわば職能給のハシリである。

器具の名まえをご紹介しよう。

一　動物にちなんだもの

きつね、猿棒（いずれも、もろみを酒袋につめるときに使う。）猿（米をむすときに使う）。猫（ふみ台）。かえる。山犬（足場に使う）。つばめ。トンボ（物指し）。かいこ棚（こうじを置く棚）。ほたるかご（沪液採取用）。雑魚すくい（もろみ上面のわらや、異物をすくいとる網）等々

二　植物にちなむもの

きうり（木製カバー）。ごんぼ（ごぼう、温度計）かぶらがい（物料攪拌に使う）。かき（柿）桶。くり（栗）。桝（五升ずつ水や酒を計量する）。うめ（梅）のみ（桶の栓）。ハス（蓮）桶。もも（桃）桶等々。

三　その他、漁村からの持ちこみぶんとして槽（酒をしぼる設備）。櫂。伝馬船（小さなもろみ桶）

四　その他

うどん屋（ふみ台）。よだれかけ。けん（見、または懸）台。地蔵屋根。大判。小判。弓と矢。三味線（吸み杓）。沓（桶の台）等々。

ものの名まえでも、こんな状態ですから、はじめて酒造りに従事する人は目をまわす。

名まえを、よく知らないために、新参の蔵人は、とんだ目にあわされる。

酒蔵は、長いこと女人禁制になっていた。女性のある部分に酒を腐らせる強烈なバクテリアがいて、その菌が蔵に、まきちらされるのを防ぐためだという説明がまことしやかに、なされていた。しかし、これは科学的に実証されたことではないので信じかねる。このことについては次のように考えるのがしぜんのようだ。

農漁村出身の筋骨たくましい生身（なまみ）の人間が百日間も独身生活を送るのですから、どうしても慾望がおきがちである。

強固な意志と重労働による体力の消耗と睡眠不足による疲労と比較的低カロリーの粗末な食事などによって、慾求は、ようやく抑えられているのだが、このような人たちのなかに、女人が入ってゆくことは事故を誘発する危険が多分にあるそこで蔵人たちは朝から大きな声で作業歌を歌って暮らした。

しかしいまでは、もう作業唄も、祈りのことばも、ほとんど聞かれなくなった。

それらのかわりに、機械の動く音が、ときには耳ざわりのほどの大きさで酒蔵のなかに響いている。

（熊本国税局鑑定官室長）

絵とは、文化とは

白藤朱根

ルーヴル美術館の「晩鐘」の名作で知られるミレエが、友人サンシエにあてた手紙（一八五二―五六年）に「百フランでも、五十フランでも、三十フランでもよいから送ってくれたまえ。金か飢えかの瞬間が迫っているのだ」と書き、また「パン屋がパンを持ってくることを断った」「商人が支払いを迫る。僕は金がなくて困っている……」などと、しきりに窮乏を訴えていることでもわかる極貧の生活に加え、積年の頭痛と「目がクルミのように大きく赤くはれて、はげしく痛み、仕事をするにも見ることができず……」といった眼病とも戦いながら絵を描き続けたといわれる。

その後、約三十年ほど下って、例の〝炎の人〟で名高いゴッホは「私たち哀れな不幸な画家は、このような容易に実現のできない職業の、人を愚かにする首木の下に苦しい生活を送るのである」と嘆きつつ、その愚かな首木の下からとうとう離れる事ができず、やがて自ら命を絶つ運命となったのである。

「絵」というものが、そういった真執（し）な画家たちの一命をかけた執念によって、はじめてこの世に生まれ出るものであり、その作品にはそれぞれの魂がこめられ、いつの時代までも人々に深い感動を投げかけるものであるとしても、私がいつも心の中で不思議に思い、かつ、考えさせられるのは、そうした名画はおろか、「絵」と名の付くようなものも、ほとんど見る機会がなかったろうと思われる一部の人たち（無学文盲ではあるが信心深く、物をたいせつにして身なりかまわず、働く事だけが生きがいであるといった人たち）の一徹な生き方の中に、いわゆる、口さきばかりの「文化人人」のイメージなどとは違った、もっと身近な、真の意味での「文化」（生活のしかた、信念）のにおいを感じ取ることができるというそのひとことである。

「人に笑われたり、無視されたりしても、そんな周囲には目もくれずに、のろのろと自分の道を歩いて、失望も落胆もしない態度で平凡な生涯を生き抜く凡庸人でありたかった」と、長谷川如是閑先生が「私の信条」という本の中で述懐されていることも「文化」というものが背負わされている盲点（知識過剰など）を突いたことばとして興味深かった。

もともと「絵」は、その制作に際して「人のために役立たそう」などと考えたり、ある特定の目的を持たせたりすべきものではなく、あくまで画家の無心な行為の結果生まれるものであるから、それと無関係な人たちがあったとしてもしかたがない事と言えようが、やはりこのひと事だけは、いつも心のどこかに居すわっていて、時おり〝天の啓示〟のように私を呼びさますのである。

およそ絵描きが、心をこめて制作に精進するという行為の中には、別に意識しないまでも、おのずから自分を大きく、強く、高く、そして深くして行くものがなくてはならないと思うし、人はそうした「絵」を見、かつ理解することによってつまりは、作者と同じ行為を繰り返す結果となるのだから、たとえそれが、人間にとって、どうしても無くてはならないものと言えないまでも〝完（まった）き人生〟を目ざす一つのよりどころとして、それが果す役割ははかり知れないものがあると言えよう。

またその事から、ひとりでも多くの人たちに、その恩恵をわかち与える場として「美術館」などが要望される理由もうなずけるわけで、そうした条件が満たされてこそ初めて、ミレエやゴッホに続く、多くの画家たちの命をかけた労苦が報われると言うものであろう。

（日本画家）